

令和3年度 学校評価

| | |
|------------|-------|
| 3.5以上～4： | 適切 |
| 3以上～3.5未満： | ほぼ適切 |
| 2～3未満： | やや不適切 |
| 2未満： | 不適切 |

| I | 教育理念・教育目的・教育目標 | 評価 | | |
|----|--------------------------|------|---|------|
| | | 評価点： | 3.2 (3.4) | ほぼ適切 |
| | 教育理念、教育目的、 教育目標の設定・達成 | | <ul style="list-style-type: none"> ▪ 本校の教育は保健師助産師学校養成所指定規則（以下「指定規則」）に基づいたものであり、教育理念、教育目的・目標も指定規則の卒業時に求められる実践能力と卒業時の到達目標および本校が目指す「卒業時の学生の姿」から検討されたものである。卒業までに段階的に能力を養うために、各年次修了までに「身につけさせたい力」も設定している。 ▪ 教育理念、教育目的・目標は、学生・学校職員でいつでも確認・共有できるよう学生便覧に明記している。 ▪ 今後、大学や他の看護師養成所の「ディプロマ・ポリシー」「カリキュラム・ポリシー」「アドミッション・ポリシー」を参考に、本校の「3つのポリシー」について研究、検討する。 | |
| II | 学校運営 | 評価点： | 3.0 (3.1) | ほぼ適切 |
| | 学校組織 学校会議等 教員適正配置 | | <ul style="list-style-type: none"> ▪ 学校運営は、設置者である佐世保市の事業計画に沿って運営方針を決定し執行した。運営組織図は学生便覧に明示しており、運営にあたっては、教務と事務で協働すると共に、教務においてはチーム名を明記し計画的に運営した。 ▪ 令和3年度は、令和4年度からの指定規則の改正に伴う業務と、新型コロナウイルス感染症への対応が全業務に対する大きな割合を占めた。会議もそれに関連した議案が多く、会議回数の増加と共に時間でもほとんどの会議が予定を超過した。この状況が、教員による評価において2.9となったと考える。 ▪ 教職員による学校運営の評価で最も低かったのは、「学校運営に必要な人材の確保と育成」で2.5あった。これは教員の業務過多を示しており、その理由としては、講義や実習における個別指導や学生の悩みなどが増加していることが大きいと考える。教員自身が現在の教授内容や方法の見直しをすると共に、現在教員が担当している事務的な業務を教務事務に移譲するなどの整理を行っていく必要がある。教務・事務全体で、ムリ・ムラ・ムダをなくす改善に取り組んでいく。 | |

| | | | |
|-----|------|---|-------|
| III | 教育活動 | | |
| | 教育課程 | 評価点： 3.0 (3.1) | ほぼ適切 |
| | | <ul style="list-style-type: none"> ▪ 指定規則に基づいた教育課程編成であり、設定した科目の考え方や単元の構成を学生便覧で示している。毎年授業概要の見直しを行い、令和3年度は、令和4年度入学生から新カリキュラムとなるため、教育課程編成を行った。 ▪ 履修および既修得認定を含む単位認定の方法は、学生便覧で示し、学生・教職員がいつでも確認できるようにしている。入学時には、単位制で履修したことがない学生がほとんどであるため、入学時オリエンテーションで、単位管理について説明している。 ▪ 新型コロナウイルス感染症については、令和4年1月中旬まで陽性者の発生はなかった。感染対策として、学生と職員で学校での陽性者発生の情報や感染対策の注意喚起、さらには健康観察アプリ（以下N-CHAT）を利用した学校全体での体調管理などに取り組んだ。講義・演習・実習などの授業は、佐世保市の感染段階レベル毎の対応をとり、オンライン授業に変更することが度々あった。その場合、単位修得において学生と学校で認識の違いがないように出欠確認のルールを決め共有した。陽性者や濃厚接触者となり出席停止となった学生へは、学修を保障するために、オンライン授業や登校が可能となったからの技術演習などの補完を行った。 | |
| | 実習 | 評価点： 2.8 (3.0) | やや不適切 |
| | | <ul style="list-style-type: none"> ▪ 令和3年度の臨地実習は、新型コロナウイルス感染症の影響で、全12実習のうち臨地で実施できたのは4実習（基礎看護学実習Ⅰ：1年、成人看護学実習Ⅰ・老年看護学実習Ⅰ：2年、統合実習：3年）であった。その他の実習は、学内や自宅実習に変更した。学内実習では、DVDや施設の協力を得て実際の場면을録画したものを活用したり、オンラインで現場の方とつながることで対象や看護場面をイメージ化できるよう工夫した。また、繰り返しのシミュレーションやグループで意見交換をしながら進めることで、看護場面を考える時間は増えた。令和3年度の3年生は、専門領域別実習は全て学内・自宅実習を実施している。前年度の3年生（2クール臨地）と成績を比較すると、0～2点下がっていた。これは、実習時間の不足や紙面上では患者像のイメージがつきにくかったことが考えられる。学内実習の限界として、紙面上もしくは教員が模擬患者となる場合、患者やその家族の反応など臨場感が得られにくいという現状はあった。2年生の臨地実習（成人看護学実習Ⅰ）の成績では、前年度と同実習と比較すると4点下がった。学生への満足度アンケートにおいても、「目標達成のための実習内容」は他の学年に比べて、0.2～0.5ポイント低い。これは、動機付けとなる前実習（基礎看護学実習Ⅱ）が学内実習となり、患者との直接的な関わりが少なかったこと、コロナ禍に入学し学内でのグループワークであったり、コミュニケーションをとる機会が少なかったことも要因と考える。 ▪ 指導体制は、専門領域別実習は全て教員2名体制をとっているが、教員の自己評価では、「臨地実習における学生の学修保障が得られる実習指導者・教員の役割を明確にしている」が2.5と低い評価となった。コロナ禍にあり臨地実習がさらに貴重になっている状況であり、実習指導者と情報を共有するなど連携を図り、リアルタイムに指導者から学生に対して問いかけてもらう指導体制を目指したい。 | |

| | | | |
|--|-------------|--|-------------|
| | 授業関係 | 評価点： 3.0 (3.0) | ほぼ適切 |
| | | <ul style="list-style-type: none"> ▪ 授業に関する教員への評価から、令和3年度は本校の教育課程との関係において妥当な内容であり、学生に対し計画を明示して実施できたと言える。しかし、授業評価の活用となると不十分な状況であった。 ▪ 成績の評価については、実習は令和3年度もループリックを使用した。課題の明確化や、評価の根拠を学生と共通認識できるツールとして活用できているため、今後も見直しを加えながら使用継続していく。 ▪ 新型コロナウイルス感染が拡大している中、本校においては、学校独自の感染対策を行ったことで、令和4年1月中旬までは1人の陽性者も発生しなかった。感染力が強いオミクロン株に変わったことで、本校も数名の陽性者が発生したが、陽性者や濃厚接触者となり出席できなかった学生へはオンライン授業への変更、講師への連絡・相談、演習の個別実施など多くの検討・調整を行った。こうした中で、新型コロナウイルス感染症の対応フローチャートを作成し、学生の出欠の取り扱いにおいては、教員が共通理解して対応した。 ▪ 令和3年度もコロナ禍での授業となったが、学生の満足度アンケートでは、全学年3～3.3（ほぼ満足）であり、昨年とほぼ同様の結果であった。 ▪ 全学生に行った満足度アンケートでは、教員の指導や対応へ不満を感じているとの記載があった。令和2年度も同様の意見があったことから、状況を全教員で共有し、問題点を明確にして教員研修の推奨など改善に向けてに取り組みなければならない。 | |
| | 教員の研究、成果の発表 | 評価点： 3.2 (2.5) | ほぼ適切 |
| | | <ul style="list-style-type: none"> ▪ 新型コロナウイルス感染症の対応と新カリキュラムの準備に伴い、教員の研究活動はほぼできなかった。しかし、新カリキュラムを構築する過程において、教員で教育内容や教授方法などについてディスカッションしたことは研究活動であったと言える。次年度も研究的視点も意識しながら、新カリキュラムを計画・運営していきたい。また、専任教員として研究的活動は継続的に必要であり、可能にするための時間の確保など業務改善の取り組みと関連しながら進めることが必要と考える。 | |
| | 学習環境 | 評価点： 3.0 (2.9) | ほぼ適切 |
| | | <ul style="list-style-type: none"> ▪ 学生の満足度アンケート結果では、教室に対する不満は大きくないが、図書やAV器材の整備の要望が出ていた。AV器材は、多数の学生が使用しかつ使用頻度が高いため故障する可能性もあるため適切な使用方法も指導しつつ不具合が生じた時に状況を確認するなど対応していく。 | |
| | 学籍管理 | 評価点： 3.4 (3.2) | ほぼ適切 |
| | | <ul style="list-style-type: none"> ▪ 学籍管理システムを導入しており、権限の区別をして適切に取り扱った。 ▪ 令和4年度からの新カリキュラムに適應するようシステムの変更を行った。 | |

| | | | |
|----|---|--|-------|
| IV | 入学・養成所の情報提供 | 評価点： 2.9 (3.1) | やや不適切 |
| | <p>入学に関すること</p> <p>本校の特徴や入学に関する情報</p> | <ul style="list-style-type: none"> ▪ 令和3年度は、市看のSNS（インスタグラム、YouTube）を立ち上げ、情報発信を行った。初年度であり、投稿数も少なかったが、新たな可能性を見出すことができた。新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、これまで学校の主な情報発信となっていたオープンキャンパスは縮小して実施するなど、情報発信が難しい状況であったことが、低い評価となったと考える。 ▪ 職業選択は職業を知ることだけではなく、そのための学びの過程を知ることにも動機付けとなる。高校生だけではなく小中学生とその親も対象として情報発信していく必要がある。 ▪ どのような入学生を求めるかについて、設置者である佐世保市の医療人材確保の方針および今後の看護師養成所の在り方等求める入学生像を明確にし公表する事が必要。 | |
| V | 学生支援 | 評価点： 3.2 (3.2) | ほぼ適切 |
| | <p>学習環境及び学習支援</p> <p>生活支援</p> <p>国家試験合格支援</p> | <ul style="list-style-type: none"> ▪ 新入学生に対して、オリエンテーション期間を設定し、教育課程をはじめ学校・入学時より、学生生活に馴染み・学習に取り組めるように、具体的なオリエンテーションを実施した。また、いつでも確認ができるよう学校生活の留意点などを学生便覧にも明示している。 ▪ 学生が自主的に学べる環境としては、令和3年度も新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、図書室も授業に使用するなど決して好ましい環境とは言えない状況であった。しかし、令和3年度は多機能型電子黒板を導入するなどよりDX化を進めることができた。 ▪ 国家試験合格支援は、1年から3年までの段階的な計画を作成し取り組んだ。 ▪ 満足度アンケートの、「悩み相談・サポート」については、2年生が2.9とやや低く、他の学年は3.1～3.2であった。悩み相談・サポートは、カリキュラム担当教員の気づきや教員間での情報交換からつながることはこれまでもあったが、令和3年度はN-CHATへの入力内容がきっかけになることもあった。 ▪ 学校カウンセリングは1回/月に予定されており、平均2人/1回程度受けていた。 | |
| VI | 就職・進学 | 評価点： 3.0 (3.1) | ほぼ適切 |
| | 進路決定 | <ul style="list-style-type: none"> ▪ カリキュラム担当との面談や、校長との就職の相談や、模擬面接などの支援を行った。 ▪ 計画的な就職・進学活動のため、1年生から就職に関する指導を今後進めていく。 | |

| | | | |
|------|-------------------------------------|--|-------|
| VII | 卒業生の把握 | 評価点： 2.8 (2.8) | やや不適切 |
| | | <ul style="list-style-type: none"> ▪ 学科・実習共に卒業認定会議において到達状況を確認しているが、進路の状況と併せて、教育理念や目標との一貫性の分析まではできていない。 ▪ 卒業生の状況は、臨地実習で教員が本人と会ったり、所属長から話を聞いていたが、令和3年度も新型コロナウイルス感染症の影響で、臨地実習が中止となったことで機会が減ってしまった。コロナ禍の卒業し就職した卒業生がどのように成長しているかを知ることで、後進の学生指導・サポートにつなげていきたい。 | |
| VIII | 地域社会への貢献 | 評価点： 2.8 (2.9) | やや不適切 |
| | 市内就職率 | <ul style="list-style-type: none"> ▪ 佐世保市内就職率は64.5%.昨年度より低下している。進学した卒業生のうち、卒業後は佐世保市に戻りたいと話す卒業生もいるため。今後それを含めた就職状況も確認する。 ▪ 佐世保市内への就職率向上するための方策の検討。 | |
| | 地域との連携と社会への 情報発信 実習施設との連携 | <ul style="list-style-type: none"> ▪ 新型コロナウイルス感染症拡大により、地域および実習施設との連携は、計画したものはなかったが、大雨時の避難所への応援や、新型コロナウイルス感染症対応業務（ワクチン接種、健康観察・事務）の応援へ学校職員が従事したことは貢献につながった。 | |
| IX | ボランティア活動 | 評価点： 2.7 (2.6) | やや不適切 |
| | | <ul style="list-style-type: none"> ▪ コロナ禍でボランティア活動はできなかった。今後は、触れ合わずとも可能なボランティアに参加することも検討していく。また、献血はボランティアの中でも、医療提供を維持するためにも重要な活動であり、看護の知識として、輸血のしくみを知ることは有意義であり、推進していく。 | |
| X | 国際交流 | 評価点： 1.7 (1.6) | 不適切 |
| | 国際的な視野を広げるためのシステム | <ul style="list-style-type: none"> ▪ 国際的視野を持つシステムは、授業の看護管理と英語である。令和3年度は、コロナ禍であり活動が難しかったが、教科外時間を活用して、グローバルに活動する方の講話や、国際大学の学生との交流などの機会を作っていきたい。 | |